

私がなぜ現在の科目を選んだか

「泌尿器科学」

信州大学医学部泌尿器科学教室

皆川 倫 範

私が泌尿器科に入局した理由は、「縁」と「空気」だと考えています。学生の当時、私は完全に腐っていました。志す科もなければ、医学には興味もやる気ありませんでした。いっそ医者などなるのはやめて、消防士にでもなろうかと思った日もありましたが、時間は過ぎました。そんな私でも、部活には精を出し、その飲み会には極力参加しました。私はバスケ部だったのですが、その先輩が臨床実習での話をしてくれたのを思い出します。その先輩は結局泌尿器科に入局し、入局後もしばしば一緒に飲みました。医者という仕事が具体性を帯びて来たのはそのころで、医者の仕事も楽しそうだと考えるようになりました。そのころ、すでに泌尿器科に好意的な印象を持っていたのかもしれない。泌尿器科学のポリクリでは酷い目に会

いましたが、当時講師をされていた加藤先生にエジプト留学の話聞く機会がありました。医者になると楽しいこともありそうだと考えたものでした。加藤先生もバスケ部の先輩で、妙な縁を感じたり、泌尿器科に興味を持ったりしたのだと思います。以後、腐っていた私も段々にやる気になって、国家試験勉強はまじめに掛かることにしました。そして、受験勉強に手ごたえを感じた私は、将来のことを考え始めたのだと思います。当初は内科系に入ろうかとも思いましたが、なんとなく、そのノリについていけないような気がしました。逆に、飲み会や加藤先生の話から伝わった泌尿器科の空気のようなものが、自分に合っているように思えました。前日に友人と大酒飲んで、その勢いを引きずったまま教授に入局をお願いしに行ったと記憶しています。いま、私は学生に接する機会があります。学生には、臨床実習で最も重要なのはその科の空気を感じるのだと言っています。今でも思います。不思議と、各科それなりの空気をまとうものだ、と。また、ふと思います。私はいま、どんな空気をまわっているのか、と。

(信大平14年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

「産科婦人科」

信州大学医学部産科婦人科学教室

小野 元 紀

私は今まさに当直中です。陣痛に苦しむ叫び声が響き渡り、当直用の PHS は鳴り止むことはありません。私はこんな生活を夢見て医者になったのだろうか。ふと、学生時代を思い出します。

私は決して真面目な学生ではありませんでした。いつもギリギリの評価で試験をすり抜け(追試もしばしば)、優秀な同姓のクラスメートと比較され「出来ない方の小野」と揶揄されたほどです。4年生まで産婦人科は難しい勉強科目の1つでしかありませんでしたが、5年生の学生実習で初めて『産婦人科』に出会いました。出血まみれの帝王切開や悲鳴が飛び交い羊水まみれの経腔分娩、いずれも産まれて初めて新生児が発する産声(うぶごえ)を聞けば純粋な感動を覚えたものです。その体験が『産婦人科』を目指すことに至ったモチベーションでした。

その後、私の気持ちがあつとくに周囲に知れ渡り、産婦人科に入局した先輩や医局長、さらには教授にまで勧

誘していただきました。そこで、産婦人科医の「女性」を想う熱意や、忙しくても助産師らと共に互いを支え合うチーム医療を垣間みました。こんなスタッフと一緒に働き夢を追いかけることが出来れば、私はきっと立派な医師になれるに違いない、そう感じて『産婦人科』を志しました。

産婦人科に入局して丸1年が経過しようとしています。まだまだ忙しさを理由にして至らないことばかりです。もっと患者を想うことが出来たのではないかと日々悩まされています。そんな打ちひしがれそうな時も、取り上げた新生児の泣き声を聞いては、自分は間違った道を歩んでいないと励まされます。

入院患者さんの急変やお産ラッシュが重なり今日の私は弱りきっています。こんな時こそ、新生児室に並ぶ新生児の顔や拙い動作に癒されてから当直用の PHS に対応します。

世間を見れば、夜間も働ける産婦人科医はお世辞でも多いとは言えず、お産を扱える病院は減っていく一方です。どう考えても今後仕事は増えていくに違いありません。しかし、これからも忙しさを充実感に変え、多くの患者さんの幸せに立ち会いたいと感じています。それが私の夢見た医師の姿なのです。

(信大平24年卒)